

令和7年11月

第2回白山市総合教育会議

会 議 録

白 山 市

# 令和7年度 第2回 白山市総合教育会議

日 時 令和7年11月17日（月）午前10時

場 所 白山市役所7階 議会第3会議室

## 1 開 会

## 2 市長あいさつ

## 3 会議事項

- (1) 質問調査から見られる白山市児童生徒の現状について
- (2) 「はくさん3育」の取組の検証について
- (3) その他

## 4 閉 会

## 出席委員

白山市長	田村敏和
白山市教育長	清水茂
白山市教育長職務代理者	竹内千恵子
白山市教育委員	安川薫
白山市教育委員	佐賀一夫
白山市教育委員	林勝洋

---

## 欠席委員

白山市教育委員	尾張勝也
---------	------

---

## 事務局出席職員

教育部長	谷口由紀枝
教育総務課長	西村幸広
学校教育課長	山口昭恵
学校指導課長	齋藤信之
生涯学習課長	東雅宏
松任図書館長	澤田憲司
美川図書館長	中野康則
鶴来図書館長	東陽一
子ども総合相談室長	和田寿美恵
ジオパーク・エコパーク推進課長	横川元子
教育総務課長補佐	瀬川達也
教育総務課主幹	山崎有香
学校図書館支援センター係長	村本美央

---

傍聴者 なし

## 開会 午前 10時00分

### ◎市長挨拶

#### ○教育総務課長（西村 幸広）

定刻になりましたので、ただいまより令和7年度第2回白山市総合教育会議を開会いたします。本日は尾張委員から、事前に欠席の連絡をいただいております。本日の会議につきましては、非公開とする内容はないと考えられますので、原則どおり、本日の会議を公開としたいと思いますが、よろしいでしょうか。

#### ○構成員

異議なし。

#### ○教育総務課長（西村 幸広）

それでは公開といたします。開会にあたり、田村市長よりご挨拶をお願いいたします。

#### ○市長（田村 敏和）

皆さん、おはようございます。本日は、ご多忙の中、令和7年度第2回白山市総合教育会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。委員の皆様におかれましては、日頃より本市の教育の推進にご尽力を賜っておりますことに、御礼を申し上げます。

さて、季節も暑い夏が過ぎまして、秋がやって来て、もうすぐ冬も近づいてこようか、というところになって参りました。そういう中で、熊の出没が最近絶えない状況でございます。特に子どもたちの登下校の安全確保ということ、そして、学校・地域・保護者の皆様には見守り活動など、多大なるご協力をいただいておりますことを本当に心強く思っておりますし、子どもたちの安全で安心な登下校を守るということが、何よりも大切なことだと思っております。様々なご協力に感謝を申し上げますとともに、心強く感じているところでござ

います。

さて、本日の議題でございますが、一つ目は「質問調査から見られる白山市児童生徒の現状について」、もう一つは「『はくさん3育』の取り組みについて」です。全国学力・学習状況調査等の質問調査結果の分析を通じた取組の改善策について、意見交換をしていただきたいと思います。また、「はくさん3育」については、ジオ育・食育・読育の3育によって育まれる力をどう見定めるのかを含めて、その力を育むための取組の検証の在り方について議論いただきたいと思ひます。

本日は、委員の皆様のご意見の忌憚のないご意見を頂戴したいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

#### ○教育総務課長（西村 幸広）

ありがとうございます。これより協議事項に入りたいと思ひますが、議事の進行につきましては、主宰者である市長にお願ひいたします。それでは市長、よろしくお願ひいたします。

---

### ◎協議事項

#### ○市長（田村 敏和）

それでは協議事項に入ります。本日の議題は二つあります。一つ目は「質問調査から見られる白山市児童生徒の現状について」、二つ目は「『はくさん3育』の取組の検証について」であります。

まず議題1、「質問調査から見られる白山市児童生徒の現状について」ということで、事務局より説明をお願ひいたします。

#### ○学校指導課長（齋藤 信之）

（資料にて説明）

---

## ◎意見交換

### ○市長(田村 敏和)

ただいま説明が終わりました。委員の皆様からご意見をいただきたいと思えます。いかがでしょうか。—————では、佐賀委員どうでしょうか。

### ○教育委員(佐賀 一夫)

私も小学生の子どもがおり、このようなアンケートがあったということや、先生方からの保護者向けアンケートの結果を拝見することがあるのですが、  
「学校に行くのが楽しい」と、大多数の子どもたちが肯定的な意見を述べてくれています。その反面、やはり一定数は少し楽しくないというふうに感じている点は、学校訪問をしておりますも、不登校の生徒児童が増えているところが、我々の側が学びの保障を実現させるという意味では課題が残っているのかと思います。ステップ教室など個々に応じた学習方法も必要性としてありますけれども、既存の学校以外の選択肢があっても良いのかと思います。先日も岐阜県の「学びの多様化学校」という二つの先例校の視察研修に伺いました。学校らしくなくても良いので、子どもたちが学ぶことを面白いと思うような施設、生きる力を養う拠点に変えられるような取組が、今後あっても良いのかと思いました。

あとはこのアンケートの一つにある、「自分にはよいところがある」というところで、なかなか日本人は自分のことを肯定する表現が苦手であり、我々大人にとっても少し苦手なところあるのですけれども、これを子どもにアンケートとして聞くと、他人が思ってくれる自分の良いところが、実際は自分の実感とずれていることもあると思うので、無理やり周りに合わせた良いところを自認させないようにすることも必要かと思います。分析にもあるように、下がっている数字は必ずしも否定的なものとは思いません。成長にしたがって「モノ、ヒト、コト」を知れば知るほど、未来の選択肢が増えていることと思いますので、希望や理想が自分にとってふさわしいか、まだ答えを決めかねている状況がこの数字にも表れているかと思います。変化の激しい時代にあって、可能性

を模索している途中なのだと思いますので、前向きな段階と捉えて引き続き、ご指導をお願いしたいと思います。

あと、「将来の夢や目標を持っていますか」というところに関しましても、先ほどと連動するのですけれども、まだ見定めがつかない子どもたちもいると思いますので、今、定まっていなくても、自分たちの現在の生活が、様々な人たちによって支えられることを知る機会も大切なのかと思います。いつかは自分もその他の誰かの役に立つという気づきを受けてもらえれば、と思っております。

### ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。それでは、林委員どうでしょうか。

### ○教育委員(林 勝洋)

この数字を見させていただいて感じたことです。全体的に見て、向上している、一部、若干低下しているものもありますけれども、全体に向上しているというふうになっております。大変良いことだと思っています。私は若いときに、これは自分の仕事柄ですけれども、経営をしていく中で「停滞は衰退である、前進は現状維持である」ということを言われました。常に現状を認識して問題点を持って、それに対してきちんと対策をとり、チャレンジしていく。それが現状を維持していくことだというふうに思っています。今まで学校訪問に何校か行かせていただきました。それぞれいろいろな学校の特色はあるとは思いますが、常にやはりいろいろなことを考えながら対策をとっている。当然、教育委員会全体もそうだと思います。それぞれ先生方はその道のプロです。餅は餅屋というふうに言われることは知っておられると思いますけれども、やはりその道のプロなので、一番、中のことが分かっておいでの方々とは思っています。ぜひ自信を持って、これからもしっかりと対策をとっていくことができれば、まだまだ良くなっていくだろうというふうに思いました。そういう意味では、これからもしっかりと、やっていただければありがたいと思っております。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。では安川委員、お願いします。

## ○教育委員(安川 薫)

先ほど佐賀委員さんからもあったように、未来の選択肢が増えているという点で、将来の夢や目標という数値が気になるという部分もあるのかと思ったのですが、デジタル革新をはじめとする技術の著しい発展といった社会構造の変化がとても早く、今ある職業が10年後にあるかどうかということが分からないような時代に、まさに答えのないところを生きていかなければいけない子どもたちに対する見えないプレッシャーみたいなものが、もしかしたらあるのではないかと、というふうに感じているところです。ただ、先日の美川中学校の道徳の授業を見させていただいたときに、納得解を得るところの大事さというか、道徳教育を通して、これから自分たちが身につけたい、子どもたちが自分で考えて行動していくために身につけていくべき、という学びがとても新鮮に思いました。外部から見てという感じかと思うのですが、とても新鮮な感じで、時代のニーズということが、道徳教育を通して進められていることが、とても印象に残りました。ある小学校で学校訪問にお伺いしたときに、あのアンケートでは小6と中3なのですが、もっと小さい頃のお子さんで、保小連携というところについて、どんなふうに進んでいるかということをお伺いすることがあったのですが、担当の先生自ら、こども園さんの方に出向いて行かれて、園児達の発達や発育の状況などについて学ばれているということもお話してくださいました。先生は本当にお忙しい中、お時間を作ってください、子どもの理解に努めてくださっている姿を感じて、とてもありがたいというふうに思ったのですが、そんな中でやはり子どもがスムーズにまず学校生活に馴染んでいく、そして成長していくための基盤を作っていくというところには、保小連携の中に家庭の支援が必要ではないかと思っています。ただ、家庭の支援といっても家庭内の問題のみということで捉えるのではなく、社会全体で子どもを育てているという意識を、社会はもちろん、家庭も共通理解として持つことが大事かと思えます。さらに、さらにさらにその前段階なのですけれども、最近本市ではママアップパークという事業がスタートした

かと思うのですけれども、ホームページで先ほど確認させていただきました。広報はくさん11月号にも掲載されていましたが、妊娠中期から未就学児を養育中の母親を対象に、科学的根拠に基づく産前産後のママの体に適した運動、子育ての学び、専門家との繋がり、三つの柱で産前産後の女性たちをサポートする、というものであったかと思えます。それ以外にも、本市には子育て支援センター、子育てひろばもホームページで15か所あることが確認できました。実際にひろばやセンターを利用されている母親の方と、先日もお話をすることがあったのですけれども、そのお宅にはお子さんが二人いらっしゃる。一人は小学校に通っていて、下のお子さんは保育所に通われている、というご家庭のお母さんでした。第一子の時は、なかなかそういう場所があるけれども、自分で利用していこうという勇気を持ってないというふうな、お声がありまして、たまたま第二子の時には、ひろばの先生から直接お声掛けがあって、行ってみたら大変良かったということで、結構利用されたということをお聞きしました。ママアップパークという事業も今スタートしたばかりで、教育委員会ではないので、あまり分からないのですけれども、これからのところでまだまだ未知ではあるのですけれども、やはり利用してみたいと思っていただいて、サポートを安心して受け入れられる環境づくりが進んでいって、家庭が中心となって、子どもの成長の基盤づくりができることが、子どもの生きる力に繋がっていくと思います。学校で今こういう取組がされていて、いろいろなところで褒める、認める、子どもたちを支えるということを学校訪問でお話を聞くたびに、本当に身に染みてありがたいと思うことがあると同時に、やはりそこに入っていく子どもたちがどのような状態で、その場所にいられるかを社会全体で支えていくベースが必要だと感じております。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。それでは竹内委員、お願いします。

## ○教育長職務代理者(竹内 千恵子)

いつも教育行政に従事いただき、ありがとうございます。我々教育委員も、大変安心してお任せできるというふうに思っております。まずこの資料を拝見

いたしまして、私は最初に「学校に行くのは楽しい」という数値が令和6年度、小学校で87.6%、中学校で86.0%というのは個人的に高いと思いました。良かったと思いました。それを90%を目指すということですが、8年後の小6の子は今、4歳児です。保育園のたったばかりの子で、8年の間には、先ほどからあるように社会情勢が変わって、教育環境も多分変わると思うので、数値についてはその時々に見直しも必要なのではないかと思っています。また、「学校に行くのは楽しい」という回答の、小6と中3の数値の動きがありますが、中学校になって落ちていないことが素晴らしい。資料3ページの「学校に行くのは楽しいと思いますか」が、参考資料として小6の時が86.3%で、同じ母集団が中3になると89.2%となっています。普通、高学年になると大現実が分かってきて、勉強も難しくなって、学校に行くのはそんなに楽しいことか、どちらかという放課後の方が楽しいというような感じになるところを、白山市の子たちは、学校に行くのが楽しいと言ってくれているので、これはやはり学校指導課が先ほど分析されたように、学校が児童生徒間、或いは先生との人間関係づくり、或いは居場所づくりをやっていただいているおかげだと思っています。

その次に、子ども主体の学びでその質を上げたいというところで、私の意見を一つ申し上げますと、子ども主体の授業というのは本当に難しいものだと思います。一体、何をもちて子ども主体の授業なのかと思うことが、学校訪問で多々ございました。多分、各学校の教えていらっしゃる先生方も、子ども主体の授業というものに対して持っているイメージが違うのではないかと、というような場面もありました。そんな中ある学校で、学年で子ども主体の授業はこういうものだ、子どもの変容はこんなことだというイメージを、まず学年間で統一して取り組んでいらっしゃるというお話がありました。ここに何かヒントがあつて欲しいと思います。いずれにしても、子ども主体の授業でもやはり学びは必要なので、学力保障ということ、基礎基本はきちんとつくように、その質を上げていただきたい、というのが希望でございます。

それからまた戻るようですが、学校が楽しいというのは、考えてみれば非常に平和なのだろうと思うのです。白山市の学校の中が平和で、子どもたちが過ごしやすくと満足度が高くなる。良く言えばそうなのですが、一方で少し刺激

が少ないというようなことを感じます。身近なところに夢や希望を持って頑張る大人のモデルというものが、あまり見当たらない、或いは見えていないのかもしれませんが、そういうところの仕掛けを、これからはする必要があるのではないかと思います。地域や社会を良くするために、何かしたいというような気持ちもそうなのですけれど、例えばジオ学習でも、こんなふうにしてお米づくりは苦勞しました、こんな楽しいことがあります、というようなお話で学校行事として終わっているのですが、これまではそれで良かったのですが、これからは、だから君たちはこんな課題が残っているから、こんなことをやって欲しい、僕らの世代ではできなかったけれど、君たちにはこういう可能性もある、或いはもっと違った解決があるというようなお話もしていただくと、子どもたちは頑張ろうかという気持ちになるのではないのでしょうか。そのモデルというものを身近に見せて、そんな気持ちにさせていくことも一つのやり方かと思っ、ジオ学習がまた一段レベルアップすることを希望しています。或いはコミュニティセンターの他の人材も活用して、自分はこんな夢を持って、こんなことを頑張ってみた、というようなことに触れるような機会もあっているのかと思いました。また、図書館に行きますと、ジオに関連した図書がいくつか並んでいますが、例えば、伝記というものは案外、夢や希望、ロマンを感じて頑張っている人のものなので、そういうものを並べてみて、子どもたちに触れさせるといった、何か少し刺激を与えて、将来の夢や目標につなげていってもらえるとありがたいと思いました。

### ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。では、清水教育長。

### ○教育長(清水 茂)

委員の皆さんからもいろいろ聞いて、私も少し重複するところがありますので、お願いいたします。まず申し上げたいことは、この四つの数値指標、第2次教育振興基本計画には20以上の数値指標があるのですが、私はこの中のこの四つというのは、非常にこの基本理念、基本施策を推進していく上で大変柱になる重要なものだというふうに考えています。なぜならば、次代を担

う子どもたちが、将来に夢、希望を持って生き生きと自己発揮できる、そしてこの自分の住んでいる地域である、ふるさと白山に対して、誇りと愛着を持って、自分自身がより良いまちづくりのために何ができるか、という意欲を育む上では、この持続可能な白山市を展開する上でもこの四つの指標というのは、これからもこの先も、大事にしたいというふうに思います。この令和14年度に掲げた目標を達成するために、私は市教委を預かる立場として何ができるのか、いろいろありますけれども今日は二つ、大きく申し上げたいと思います。

一つは、竹内委員さんからも少しありましたけれども、子どもたちが生き生きと学校生活なり地域での活動をする上で、その支えとなる指導者、学校でいうと教職員の資質向上に向けた施策の展開です。とりわけ大切にしたいのは、学校でいう教師自身が自分を磨く、自己の指導力を磨くということに、やりがい感を感じられるような支援をしていきたい。先ほど子ども主体の授業ということで、先生の子どもが主体の授業に向ける納得解というふうに安川委員さんが言われましたけれど、先生自身が納得して、そしてそれにチャレンジするという、やりがい感というものは持たせたいと思っています。教員の本来業務である、授業に対する取組についての姿勢をより高めていくためには研修が必要ですし、そしてプラス、今言われている働き方改善の取組も必要だと考えています。これはこの間の教育委員会でも少しお話したかもしれませんが、国の給特法が改正されて、業務管理等の健康確保の計画策定公表が義務づけられました。次年度から教員が働きやすく、働きがいを持った計画をこの総合教育会議の場で、また、市民にも公表していくということになりました。私たち事務局は今、この計画を一生懸命作っていますが、2月ぐらいにこの総合教育会議を開いていただいて、提示したいと思っています。繰り返しですけれども、こういった教職員がやりがい感を持って仕事するための計画について、ぜひまた審議を願いたいと思っています。それとやりがいということで教職員がなるほど先ほども言われました、自己肯定感が他の市、県の中でも伸び具合があるということ、この勢いがあるということは自信を持って欲しいのです。私も学校訪問をしながら学校の先生たちの話、また様子を見ていくと、結果を認める、褒めるというよりも、〇〇ちゃんのこんな姿勢が良いというその過程を認めていくという認め方が、とても子どもの安心感を伴う自信に繋がっているのではな

いかと思っています。ぜひそういった取組を再度、現場にも言って、教員が自信を持ってやっていければ良いと思いますし、ここからは安川委員さんの話に繋がるのですが、家庭です。どれだけ学校がこうやって認めることを大事にしても、家庭でも同じような姿勢がないとなかなか同じ方向に進まないのです。ぜひ家庭も、そして地域にもこういった子どもたちの取組過程を認める、自己肯定感が上がる働きかけについて、アピールし、ともに育てていく姿勢を作っていけたら良いと思っています。

二つ目は、関連しますが家庭、地域との連携を強める施策を充実させていきたいということです。この基本計画には、家庭、学校、地域、社会、企業、行政の協働を大きく取り上げました。それぞれの機関が役割を自覚して、当事者意識を持って協働のサイクルを回していくことができるよう、行政として適切な働きかけをしていきたいと思っています。そうした観点からも、3年目を迎えたコミュニティスクールの機能化には力を入れていきたいと思っています。今年度は、コーディネーターの機能化を目指した研修会も年間3回実施しています。ぜひこのコミュニティスクールが単なる会議体で終わらないように、形骸化しないように、コミュニティスクールが生み出す、いわゆる地域学校協働活動の積極的な展開をねらいたいと思っています。そんな観点からいくと、この将来の夢や目標を持つということであると、先ほど竹内委員の言葉を借りれば刺激です。私はその刺激をもっと別の言い方にすると、本物との出会い、子どもたちが学校の先生以外の本物と出会うという機会も、ぜひ充実させていけたら良いと思っています。それと地域や社会をより良くしたいと思う意欲づけには、これは皆さんご存じ、美川小が行った空き家プロジェクトです。地域課題の改善に向けて、子どもながらでも何ができるのか、ということを考えられた実践でした。これは国からも高く評価されております。こういった好事例を行政として間に入って各校にも紹介する、それぞれ地域に働きかけることで、協働の機運がより高まっていくことによって、子どもたちのそういった指標の数値も上がっていくのではないかと考えております。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。その他に何かご意見ございましたら・・・林委員ど

うぞ。

### ○教育委員（林 勝洋）

私は、今回初めて教育委員やらせていただいて、今まで学校というもの、教育というものに関しては、小学校でPTAを少しやらせていただいただけで、さほど関心もなかったというのが現状ですし、見えないというのが実際だと思います。地域の中で、教育委員をやらせていただいていることが話題になって、少し皆さんに関心を持っていただく機会も増えたのかというふうには思います。なので、もっと発信する必要があるのではないかと。地域、それからいろいろな、例えば今言われましたけれども、現場の人、地域の人が先生、講師になるという機会を、もう少し行政の方から発信するようなことが必要なのではないかと。なかなか先生は話すことがとても難しいので、大変だとは思いますが、いろいろな人を少しずつお願いしていく、探していくところから始めないといけないのかというふうには思いました。学校訪問に行ったときに、ある学校の校長先生は、やはり校長先生自らが地域に出て、今こんなことが問題なので、こんなことをして欲しいということを、地域の中に投げかけているということでした。それで対応してくれる人が1人からでもいいから、1人いらっしやれば、そこからまた輪が広がっていくというようなことを言っておられました。それは学校単位もそうでしょうし、行政全体、教育委員会全体としてもやっていけば、もっともっと機会が増えて、子どもたちが社会全体を見る選択肢が増えるのではないかと。それがやりがいといった、いろいろなところに波及していくのではないかと、というようなことを感じましたので、ぜひそういう施策、対策もお願いできればと思います。

### ○市長（田村 敏和）

ありがとうございます。その他ございますでしょうか。

### ○教育委員（佐賀 一夫）

先ほど林委員さんと教育長もおっしゃった中での、本物に触れるというところで、先ほどあがった美川小学校の町家プロジェクトに、私もゲストティーチ

ヤーとして小学校の授業に行ってきました。普段、学校訪問で先生方にこうしたら良いのではないかと、何か立派なこと言っているつもりでも、実際にやってみると、なかなか大変だということが本当に痛感しました。私が教えたのは工作で、実際にのこぎりを引く、木を刻んで組み立てるといったことです。多分、子どもたちにとって、将来、自分はそういう職人になるつもりはないという思いがあるかもしれません。これは勉強以外でもそうなのですけれども、学校とは、今まで知らなかったことを学び、できなかったことが身につく場所だと思います。そしてその中で、将来、自分が例えその職業につかなかったとしても、誰かがこんな仕事をしてくれているから、この世の中が成り立っていることを知ってほしい、という思いで授業をさせていただきました。白山市内いろいろな学校の掲示板を見ると、豆腐屋さんに行ってみた等、いろいろな職業について、そのプロの方に、本物に触れるということで講師やゲストティーチャーまでいかなくても見学等いろいろ勉強されているようです。それも含めて、こんな人たちが働いてくれているということが分かると思うので、そういった意味でも視野を広げるという点ではとても良いことだと思って取り組んでいました。本当に子どもたちは、初めてのことで恐れることなく、チャレンジしてくれると思いました。我々も仕事を休んで行くもので、先ほど林さんが言われたように、外部、地域の人材を使おうとすると、時間の確保が大変で、受ける側もかなり調整が必要なのですけれども、それは粘り強く、その地域の学校は地域で守る意味で、コミュニティスクールの真髄をコーディネーターの方がうまく発信していただいて、企業側としても利用して欲しいというものがありますので、ぜひ学校もその辺を遠慮することなく、投げかけていただければ良いと思います。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。他にございますか。————先ほどいくつかお話ございましたけど、まずコミュニティスクールのことなのですが、実は先日ミライ会議に行ったときに、コミュニティスクールのことについて、分からないという声が幾つかありました。また、それ以外にも先ほどお話ございましたが、教育でどういうことをやっているか見えないというお話がございます。今、コ

コミュニティスクールのコーディネーターにいろいろ発信して欲しいというお話もございましたが、このコミュニティスクールを始めたという大きな要因として、やはり、地域の皆様に学校の中で活躍をしていただく、または地域へ子どもたちが行って活躍してもらい、そのためのコミュニティスクールとしてコーディネーターを配置しているわけですが、なかなか市民の皆様には伝わっていないところもあるのかと思います。今、シティプロモーション推進課という課を作っておりますが、私も各地域、回りながら、やはりいろいろなことを施策としてやっているけれど、伝わっていないことが多いということを感じています。今回のこの質問調査の結果についても、いろいろ広報はしていると思いますが、白山市の子どもたちは今こんな状態です、ということ、保護者の方もそうですし、当然市民の皆さんにも、伝わっていかなくてはいけないと思うのですが、教育委員会としてこういう政策を取り組んできた結果、今こういう子どもたちの状態です、といったものの発信も必要なのかということも思っております。

あと、自己肯定感の向上ということで、資料から自己肯定感の向上が見られるわけですが、このことについて、過程であるとか、アピールすることをもっとどんどんしなくてはいけないのだろう。それは行政の方の仕事として必要だろうというふうに思っています。白山市内の学校では、この次の議題2にも関係してきますが、こういう取組をすることによって、こういう力がついている、こんな子どもたちが育っている。佐賀委員に質問したいのですが、例えば今、ジオの交流会を見られたと思うのですが、昔の小学校と何か変わったという感じを持っていますか、どうでしょう。

## ○教育委員（佐賀 一夫）

学校訪問で見ると、男女関係なく仲良くやっているということはありません。対話と言いますか、授業中でも問いが先生から投げかけられて、隣と相談してみるということが大変スムーズで、子どもたちもおそらく先生の話の聞いている間に頭の中で問われるかも、という整理がされているのか、とても明快に答えていると感じることがよくあります。我々の時は、なかなかきちんと答えることができなかったし、女子と話すなんて、気恥ずかしくてできなかった

ことでも、とてもうまくクラスを先生方が学びの空間としてまとめてくださっており、安心して発言しているということは感じます。昔のことをたまに言うことがあるのですが、先生が求めている答えを答えなくてはいけない、みたいな雰囲気があって、いろいろなことを大人の期待に応えなくてはいけないというものは感じていました。先日の美川中学校の道德の授業でもあったのですが、「答えが決められた世界を生きてきた」という言葉は心にグサツときました。今の子どもには、自分の子どもにも言うのですけれども、間違えてもいい、宿題にしても答えを見ずにやってみて、間違えても直せば良いのだから、というふうに言っているので、やはり大人が用意した正解に臆することなく学び始めているという雰囲気は大切だと感じています。

### ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。やはり白山市として様々な取組をしてきた結果として今、子どもたちがどう育っているのか、この質問調査もその一つだと思います。ただ表れてくる状況として、例えば、不登校の増加というお話が先ほど出ていましたが、学校以外の選択肢、学校というところに馴染めないのならば、学校以外でも学べる場を作りましょう、ということが今の世の中の流れだと思うのです。学校というものも、いろいろ形も変化しなくてはいけないだろうし、子どもたちの状況から、あくまでも教育委員会としては、子どもたちが今こんな状況だから何を変化させなくてはいけないのか、何をやってきたからこんな状況になってきたのかはしっかり検証して、その取組の改善をお願いしたいということを思っています。そのための質問調査だろうと思っていますので、また今後ともどうぞ、皆様から忌憚のないご意見を出していただきながら、この質問調査の結果をぜひ有効に生かしていただければ、ということをおもっています。それでは時間も大分来ておりますので、議題2の方に入らせていただきます。「はくさん3育の取組の検証について」事務局より説明をお願いします。

### ○学校指導課長(齋藤 信之)

(資料にて説明)

---

## ◎意見交換

### ○市長(田村 敏和)

それでは委員の皆様からご意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。—————では佐賀委員、お願いします。

### ○教育委員(佐賀 一夫)

はくさん3育のうち、まずジオ育ですけれども、私の住む美川地域は手取川の河口地域ではありますが、なかなか川に触れ合う機会が少なかったもので、そういった話をしているうちに(白山手取川ジオパーク推進協議会の)スーパーバイザーの尾張委員に連れられて、美川地域で川遊びするぞ、ということになり、夏に美川小学校の6年生を対象にした、川で遊ぶ体験をする教室を開いていただきました。参加させていただいて思ったことなのですけれども、やはり川の水の流れる音や鳥のさえずりなどもそうですけれども、川独特の香り、手で感じる温度、足で踏んでいる石の感触が、日常、車を運転して見ている川、走っているときに離れたところから見る川とは全然違って、知っているつもりだったけれども、実際に本物に触れることで、全く違う感覚が生まれました。そこで川に浸かりながら思ったのが、自然や風土が熟成された人の営みが、昔からあったのだろうということを想像しましたし、参加している子どもたちの参加している姿を見ていまして、今まで、ここは危ないからだめだというふうに遠ざけられていた自然の環境を、尾張委員からは、当然、大人の責任として安全にきちんと準備をして、怖いものを敬いながらも、恐れるものを恐れながら、つき合っていけば、十分楽しめるということを教わりました。参加している子どもたちを見ていても、スイミングスクールに通って、かなり競技として水泳が得意な子がいたのですけれども、彼にしてみたら、水の中に入るといことは多分、競技性があるものという感覚が強かったと思うのです。本当は必要ないのでしょうけれども、みんなと一緒にライフジャケットを着てドボンと飛び込んで水圧を感じてみたり、川の流れに逆らって泳いでみたり、あとは流れに身を任せて流れてみたりしていました。ご両親も一緒に参加されたのですけれども、こんな表情を見たことない、みたいな感覚でおっしゃっていま

した。ご両親も熱心な方で、競技性を重視して育てていたと思うのですが、こんなふうに、自然と触れ合うことは、とても良いことだというふうに感じておられました。実際、その子もおそらく競技の場に戻っても、そういった感覚、水に対しての捉え方が変わって、今後の競技人生にも活かしてくれると思ったので、そういった視点もあって、とても良いことだと思いました。

食育に関しては、国の動向を見ていると、近い将来給食は無償化になるのではないかと推測します。食育の観点から、フードロスも含めて少し倫理的な点も取り組んでいく必要があるのではないかと思います。やはりこれまで自身の家族の方で負担していた費用が、大きく税金で賄われるということになっていく、誰が払っているか分からないという状態が長く続くと、やはりそこには落とし穴というか、無駄にしても誰も損しないという感覚に陥りかねない。それはご家族も含めてですけれども、安全にきちんといろいろな方が関わっていただいて、安全なものを食べているという認識も含めて発信していく必要があると感じています。今後心配なのは、無償に慣れてしまうことが、懸念されると思っています。先ほど言ったように食の安全も注目されると思います。決して品質を落とすことなく、質量ともに確保したものを提供していかなければならないですし、また、薬品や添加物など、最近よく言われる、農薬を最小限に抑えた生産加工方法なども求められる時代になってくると思うので、その辺も注目される以上は、取組もしっかりとしていきたいというところです。

また、読育についてなのですが、前回の会議でもあったので重複することもあると思うのですが、読書とは、読んで取り入れる、知識を詰め込むだけではなくて、自分の内側で起こった反応を感じて、それをまた出して欲しいというふうに思っております。感性を豊かにするという教育、心も動く体験をして、それに気づいて表現する。これはジオ育もそうですし、食育もそうですし、読育に関しても、先ほどから出ている正解のない答えを出していきける取組だと思うので、その辺は特に先生だけではなくて、やはり地域、家庭も協力し合いながら、常に子どもたちに投げかけていくことが必要かと思いました。

## ○市長(田村 敏和)

では、林委員お願いします。

## ○教育委員(林 勝洋)

まず、ジオ育からです。私も白山手取川ジオパークの中で仕事をさせていただいているということで、特に環境という部分に関しては、常々考えさせられるところが多いです。それからもう一つ、私は手取川七カ用水の役員もやらせていただいております。このジオパークは白山を源にして、手取川流域をすべて含んだところと、全国で10か所あるユネスコ世界ジオパークの一つになっているということで、大変恵まれた地域で、私は仕事をさせていただいていると思っています。日本全国、どこに行っても、こんなに水の豊富なところはありません。というのは、私は今まで仕事をしながら、日本各地、結構研修には行かせていただきましたけれども、1年中を通して、川に水が流れているというところは、そうそう日本にはございません、というのが実際です。新潟平野は広いですがけれども、水は停滞しています。関東平野もそうです。木曾川、木曾三川の部分に関しては、若干の流れがありますけれども、ここまで速く水が流れているところはありません。北陸3県の富山、福井も一部あるぐらいですので、ここは石もありますけれども、水という部分に関してはとても良い場所だというふうには思っています。そんな中でジオ教育という話になるのですけれども、やはりとても綺麗なところがたくさんあります。私も田植えをした後、獅子吼高原に上がって、自分のところを見ます。あんな水の反射した綺麗な景色はそうそう見られることはないです。そこでパラグライダーがたくさん飛んでいるのが、とても良いというふうには思って見えています。そういうことを考えると、これだけではなくて、もっとたくさんあると思うのですけれども、子どもたちにはやはり、現場の生のものを見て欲しい。そこでどう感じるかというところが必要なのかと思います。大人の私でも、見たときにとても綺麗だというふうには思いますので、子どもたちは多分もっといろいろな感覚を持つのではないかと思います。ジオ遠足という行事がありますけれども、ぜひ、もっと活用していろいろなところを見ていただくと、もっといろいろな感想を持つのではないかというふうには思っています。それがまたいろいろなところに波及を

していくと思っています。

食育ですけれども、先ほど言いましたが、仕事が農業なので、食に関しては結構、個性的な考え方を持っているかもしれませんが、今日は少し話をしたいと思います。まず日本は、ヨーロッパでもアメリカでもオーストラリアでもありません。日本は日本固有の農業の形態があるというのが、私の根本的な考え方です。食に関しても、例えば、日本の農産物というのは、衣料品、工業製品と同じようなレベルで見られています。傷があったら駄目、虫がついていたら駄目、そういうものは一切流通しません、というのが市場流通の現状です。本来そうではなくて、食育という話になると、子どもにどういうものを食べさせたいか、食べてもらいたいかというのが、基本に出てくるというふうには思っています。そこには当然、安全性、それから栄養性というものがついてくるというふうには私は思っています。一番問題は、やはり安全性、できれば農薬はゼロが良いけれど、なかなかゼロは難しいというのが事実なので、どこまで下げることができるか、ということを考えながらやっておられる方はたくさんいると思います。そんな人を探すのも一つだというふうには思います。当然、白山市でも、緑ののぼり旗の地場産食材を使っている店も含めての話ですけれども、地産地消を今やっています。もう1点、地場産食材は、そこそこあるのですけれども、冬場は物があまりないのです。学校を回っていくと、学校のエリア内で生産されたものを使って、給食に出しているところは結構あるのですけれども、もう少し広域で見ても良いのではないのでしょうか。学校のエリア内だけではなくて、松任地域でも結構大型に野菜を作っている農家もたくさんあります。そこは校下だけではなくて、全体でも対応できるのか、できないのか。そういうことを考えれば、多分農家さんも楽な部分もあるでしょうし、難しい部分もあるかもしれませんが、もう少し大きなエリアの中で物を調達する、という考え方もあっていいのかというふうには思っています。もう1点は、食育の中で先ほどもあった家庭との繋がり、私達の時代は、お母さんが食事を作るので、私らが若いときは、お母さんにばかり食育の話をしましたけれど、今はそんな時代ではないので、男も女も両方とも、しっかりと食に関する知識なり経験をする必要がある時代になっています。家庭、親に対するアピール、情報発信を学校だけではなくて、地域全体でしていく必要があるのかと思って

います。

次に、読育ですけれども、学校訪問をさせていただいて、どこの学校も図書に関してはとても真剣に考えて、いろいろなことをやっているというふうに思いました。その中で特に今後必要だと思ったのは、(2)の主な取組②の、各教科における授業での図書資料の積極的活用です。具体的にどうやるのかは分かりませんが、その機会を増やしてあげる。この取組の検証のところにも二極化しているという記載もありました。読む子はたくさん読むのかもしれませんが、読まない子もやはり相当数いるというふうには思います。そこは積極的にこちらから機会を増やしてあげることによって、本を読む機会を作ってあげると、もっと機会が増えて、読む方に向けていくのかというようなことも思いましたので、やはり授業での活用というのは良い取組なのだろうと思っております。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。それでは、安川委員をお願いします。

## ○教育委員(安川 薫)

私からは、食育と読育についての意見を述べさせていただきたいと思います。まず食育に関してですが、食育の本質というのは生きる力を養うこと、生きるためには食べることは大切であるということで、私たちの体と心というのは口から入るもの、鼻から入るものでできていると言って、過言ではないと思います。そんな中で飽食の時代と言われて、もう久しいかと思われま。飽食というのは食べるものが飽和状態にある、食料が豊富で食べ物に不自由しない、という意味では豊かな食生活が実現した時代なのでしょうけれども、その種の豊かさが故の弊害というものが顕著に出ているのではないか、ということです。その一つとしては、食に対する関心の低下ということが、いろいろある中で挙げるとしたら、あるかと思えます。どこか買い物に行けば、食料がすぐ食べられる状態であったり、それなりにすぐ食べられる状態で簡単に手に入ったりします。もちろん私もそういうものに助けてもらう場面が少なからずありますし、それらを否定するという事ではないのですが、食への関心の低下が進むにつ

れて、食材を選んで調理する、食事をゆっくり味わったりするということに対しての何か感動、豊かさが薄くなっているのではないか、というふうに感じています。あとはすぐ食べられるものを買って食べるということで、偏食も増えているのでは、ということも感じています。昨今では、新型栄養失調という言葉も聞かれるようになりました。新型栄養失調とはどんな状態かと言いますと、カロリーは足りているのだけれども、タンパク質やビタミンやミネラルが足りていない、不足している状態を指します。カロリーは足りているということは、充足している、もしくは取り過ぎている。そういった一方で、タンパク質であったり、各種ビタミンであったり、鉄や亜鉛などの微量栄養素で足りていないものがある。これらが要因となって、心身に様々な影響が出ることを危惧しているということです。例えば、アンケートの中で、朝食を毎日食べていますかという質問に対して、非常に高い数値ではあるのですが、では、こういった内容のものを食べているか、というところまでは踏み込めないという現状があるのかと思います。ただ、やはり朝ご飯はとても大事で、例えば、パンにジャムを塗ったものを頬張ってきたということになると、血糖値が一気に上がって、それがホルモンの分泌で一気に下がって、何となく学校にいても元気がない、と思ったら、また血糖値が再度上がったときに、何か機嫌が悪いという状態になるというのは、よく聞かれる話かと思います。なので、朝ご飯を食べているか、食べていないかということだけで判断するのは、まあまあ危険なことではないかと思っています。もちろん大人も子どももですけど、朝はぎりぎりまで寝ていたいですし、朝の数分はとても貴重なのですけれども、新型栄養失調ということから言うと、しっかりと質的な栄養というものを補完することが、1日の始まりとして、体の面でも心の面でも、とても大切ではないかということが私の意見です。これは身近に自分ごととして起きて、いろいろな書籍などを読んで知った情報からのことなので、医学的なこととか、詳しいことは私の口からは言えないのですけれども、実践して、実際に良くなったという体感として、感覚が働いて足りる状態になったということがあってのお話です。やはり摂取したもの、控えたものがあって、足りなかったけれど、取り入れることで足りるようになったということができると、エネルギーとして体の中の循環が回っていくことで、何か内々にという感覚が外に向かって発散した

いというふうになるとも言われています。栄養をしっかりと整える、体を整える、心を整えるというところは、決してゴールではなくて、ここからスタートということに関して情報発信して、また周知していただきたいと思うのですが、実は学校ではかなりやっつけいらっしやるのです。学校の給食だよりを見ていると、今、私がお話したことは本当に和食の定義で、基本の「き」であるところに集約している部分が非常に大きくて、よく噛んで食べましょう、お出汁を取りましょう、あとは「まごわやさしい」ということで、本当に学校の給食だよりに、必ずどこかの月では目にする内容なのです。ただ、やはり先ほどからあるように伝わっていない現状が重くのしかかっているのかと感じているところです。やはり年齢が小さくなればなるほど、食の選択権というのは、その養育者に委ねられることとなりますので、子どもが学校でこういう学びを得た、それは良いのだけれど、では家庭に落とし込む、浸透していくかという、なかなか難しく、ずっと課題でもあるのかと思うのですが、何とか良いふうに進透していったら良いと思います。

それから読育についてなのですが、これは前回の総合教育会議でも少し触れたところなのですが、これも学校ではなくて、ブックスタート事業というところでお話をさせてください。その後いろいろお聞きして回ったところで、おやっと思ったことがあって、4か月健診のときに、ブックスタート事業は担当の方が何人かいて、対象の親御さんに対して絵本の良さというものを伝えて、本の読み聞かせをしてくださる機会だったと思うのですが、コロナ禍から、ただ本を渡すだけになってしまっているということを知って、とてももったいないと感じています。本に触れるということは、やはり親子のスキンシップもありますし、教育的なところと言えば語彙力が増える、語彙力が増えれば表現力が増える、表現力が増えたら自分の気持ちを伝えたりすることがしやすくなるので情緒が安定しやすくなる、というような結構自分を諫めたり、人との人間関係にあっても通りが良くなることにも繋がっていくと思うので、ぜひ、このブックスタートの部分に関して、もう少し丁寧にしていただけたら良いというお願いというか、そういうことを感じました。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。では、竹内委員お願いします。

## ○教育長職務代理人(竹内 千恵子)

まず、ジオ育については、このジオ学習交流会が今年も本当に盛会で良かったと思えました。これをぜひ白山市の特色ある行事にして行かれたら良いかと思えました。また、その成果がこの質問調査からよく出ていて、非常に自然に近いところに、自分たちがいるということを実感しているのが良いと思えました。一つ危惧するのは、あまり学校に負担になる行事はスクラップアンドビルドで、やはり何か一つ行事が増えたら、どこかは少しアクセントをずらすというようなことも考えていかないと、先ほどの教育長ではないけれども、勤務時間が長くなったり、先生によっては負担に思ってしまったりとかわいそうなので、できる範囲でこれから続けていけば良いかと思えました。

食育については皆さんいろいろおっしゃっていただいて、その通りなのですが、確かに私も子どもが小さい頃は、5千円ぐらいだったと思うのですが、まだ給食袋にお金を入れて毎月子どもに持たせていました。毎月子どもに、この5千円は、お母さんが稼ぐときは1日仕事をしてこないともらえないお金だから、とにかく残さないというようなことを毎月言っていたのが、いつの間にか銀行引き落としになって、そんなことを言う機会も失ってしまった。先ほど、佐賀委員さんからもあった、あまり便利になってくると、そういう接触する機会が少なくなるということを私も思い出したところです。この食育で学校によって差があるということは、指導が届いていることを表していると考えられます。特に中学校の委託の方なのですが、松任地域で残食が多いことは多いのですが、これは小学校では自校給食で丁寧に作られたものを食べてきたのが、中学校で委託になってしまって、子どもたちが少し気持ち的にダウンしているのかもしれない。やはり残食に学校差が出るということは、指導がまだ届く、指導する余地のあるものだというふうに私は捉えているので、また、これから取り組んでいっていただきたいと思えます。

読育については前も申し上げましたが、非常に白山市は充実しております。特に授業で味見読書、図書館に国語の先生がいらっしやって、司書とチームテ

イーディングをする、或いは隙間時間をうまく活用して、中学生でも本を読む機会を持っていることで、中学生の読書の時間が増えているというのは、やはり素晴らしいことだと思います。大体、中学生になったらあまり本を読まない、高校生はもっと読まない、大人になったら、大学生はもっと読まないという話もあるので、小学校で冊数が少ないのは、先ほどもあったように多分、家庭環境も大きいのではないかと思います。家に25冊以上蔵書がありますかという調査が先日出ていました。35%の家庭に25冊以上本がないというようなデータも出ているので、やはり環境、小さい頃から読み聞かせをする、図書館に連れて行くということも小学校の間では影響しているけれど、中学校になって数値がこれだけ良いということは、やはり教育委員会はじめ学校が読書の教育に力を入れてきた成果が中学校になって出ているのだろう、と私は判断をしているので、これからもぜひ横のネットワークを強くして取り組んでいただきたいと思います。また司書の方が、どの学校もとても表情が明るいのです。これは多分、司書という仕事にプライドを持って楽しさを感じながらやっただいているから、あんなに良い表情をしていらっしゃるのだろうと思いますので、学校によっては図書館が子どもの数に合わせて狭い、ぎゅうぎゅうだったところもあるので、ここはまた行政の方でも考えていただければ良いかと思いました。それから、松任小学校だったか、松任図書館の方に見学に行って何か勉強してきたというような話を、Webか何かで見たような気がするのですが、学校の図書館で済ませないで地域の図書館に子どもたちを連れていくことで、生涯学習としてどんどん身近なものになって、大人になっても読んでいくのではないかと、図書館が非常に身近なところにあるということで、読んでいくのではないかと、ぜひそのようなところも考えていただければ良いのではないかと思います。あと、先ほど申し上げた学校図書館支援センターの充実もあって、他県ではどんな先進的な取組がされているかというところもまた研究していただいて、白山市に取り入れられることがあれば、取り入れていただきたいということが私の感想です。

## ○市長(田村 敏和)

ありがとうございます。それでは清水教育長。

## ○教育長（清水 茂）

私も委員の皆様が言われた通りです。はくさん3育には、白山市の教育を広く内外にアピールできる力がある、魅力があるというふうに思っています。今、魅力という言い方をしましたけれど、少し言い方を変えると育つ力があるということです。その育つ力というものを、教職員を初めとする指導者、それから親を含めた養育者に、いかに伝えていくかが肝であるというふうに思っています。例えば、ジオ育でいきますと、大地の成り立ちはもとより自然や文化歴史に対する関心が高まって事象に対して、これはどうなのだろう、という疑問を持って、探求していくという、今問われている探求力という力がつくと思います。また、過去から現在に繋がるこの大地や自然、そして人々との繋がり、営みに対する理解が深まって、先ほどの佐賀委員の話ではないけれど、その深まったものである内側のざわめきを何か人に伝えたくなる、その人に伝える力ということにも、繋がっていくというふうに思います。そうした学びを重ねていくことが、ふるさとを愛する気持ち、誇りに思う気持ちになっていくのではないかと思っています。それから、これも佐賀委員が言われましたけれど、川遊びのように直接自然と触れ合えるという体験的な学びを通して人やもの、ことによって、豊かな感性が育まれていくというふうに思います。食育も読育も然りです。こうしたそれぞれによって育まれる力を、いかに指導者等に伝えていくかというところを大切にしていきたい。学校で言うと、現場の先生たちがそういった力が育めるという納得感を持って理解して、学校のカリキュラムマネジメントを意識した、工夫した取組を展開していくことを期待しています。ただ、先ほど正解のない学びと佐賀委員が言われました。確かに正解のない学びではありますけれども、繰り返しですけれど、こういった力がついてきたかどうかという見極めは必要で、させっぱなしではだめだと思っています。そのためのPDCAシステムが、いかにできるかということを考えていきたい。市教委としては、各校が取組の成果や課題を検証していく上で、今日提示したアンケート結果もさることながら、もう少しこういう観点で、この3育の取組評価ができるのではないかと、そこら辺を我々は大事にして、各校では学校評価に位置づけるなどして、その力がどこまで育まれたか、到達度を把握できる

ようにしていきたいと思います。

これは個人の考えですけれども、例えば、ジオ育に絡んで児童生徒へのアンケートを市独自でやるとしたら、地域の自然や文化、歴史に関心を持って進んで調べようとしているか、というような問いならば、それに児童生徒がどこまで進んでできたか、という把握もできると思うので、こういった市独自の質問項目を設けて、各学校に役立つ検証方法を提示していきたい。そういった結果を市の学校全体でまとめて、先ほど市長も言われましたけれど、3育でこんな力がついたというアピールを、どんどんできれば良いというふうに思っています。それから、はくさん3育を支える環境づくりとして、これも委員の皆さんが言われたことと少し重複しますが、学校以外の学びの機会を充実させていきたい。先ほど1番目のテーマで行ったコミュニティスクールを活用した地域学校協働活動もそうですけれど、先ほど安川委員が言われた幼保小の連携、健康福祉部とも連携して、乳幼児や保育園においても3育が推進できるような・・・糸魚川市に視察に行ったときに0歳から18歳までジオ育で繋がっていたのです。子どもを18年間かけて3育によって育まれていく、というプログラムも何かできると良いというふうに思いました。

それから読育については、前回の総合教育会議でも言いましたけれど、来年度、第5次白山市子ども読書活動推進計画を策定していく中で、今日ご意見のありましたことも含めて、位置付けていきたいというふうに思っています。それとやはり個人のそれぞれ内側で起きた学びの発信、という機会も充実していきたいと思います。ジオ育、読育でいくと、ジオ学習交流会、ビブリオバトル、調べ学習コンクールといろいろやっていて、アウトプットする機会はあるのですが、どうですか、食育についてのアウトプットする機会というのは少し不足しているような気がしました。ですので、何か市として取り組めないかというふうに考えます。それと学校だけではなくて、身近な地域においても、子どもたちが学んだことを発信できる機会、例えば、コミュニティセンター等の文化祭等で、やっているところもありますけれど、子どもがスタイルを表現する場を大事にできたら良いと思います。これは子どもの権利条例にうたわれている、参加する権利にも繋がると思っています。いずれにしても市教委としまして、それぞれの教育現場で良い実践が持続的に展開できるように、今後も現

場の状況を把握して、取組を展開して参りたいと思っています。

**○市長(田村 敏和)**

その他、何かご意見、またはご質問ありますでしょうか。

**○教育委員(林 勝洋)**

ほぼ7か月、委員をやらせていただいて、学校も回らせていただいて、それぞれ特徴はあるというふうに思います。その中で、やはりその特徴の素晴らしいところ、それぞれあるのですけれども、その良いものをどう真似るといふか、取り組むといふか、そういうところがもう少しあったら良いのではないか。各学校間で、全体でもそうでしょうけれども、例えば、組織を良くするときには、業績を見たりするときには、当然良いものを見たり学んだりしながら、全体をレベルアップしていくというところがあると思うのです。当然、教育の中にもそういうことは必要なのだろうと思います。そういうことが、ぜひできれば良いかというふうに思います。当然、視察、研修は良いのですけれども、私は本物の声を聞くこと、実際どうやっているか、私たちも視察に行きますけれども、あくまでも外見だけしか見えないことがよくあります。良い経営をしているけれども、外観で見ただけで本当にどうやっているか分からないところがあるので、できれば生の声を聞きながら、どうやっているのかといふところがあれば、もっと全体が良くなっていくと感じています。どこか偏った何かだけではなくて、いろいろなことに対してできると、もっと全体が良くなっていくというふうに思います。

**○市長(田村 敏和)**

ありがとうございます。他にございませんか。

**○教育長職務代理人(竹内 千恵子)**

それに関しては私も思うのですけれども、学校の中でいろいろな取組を見ていて、何か自分たちだけで満足している、白山市だけで満足しているは、だめなのだろう、と。そのときに、他の市町から異動された先生が、どんなふう

感じるかというところを、きちんとすくい上げていただくと良いと思いました。教育事務所からアドバイスをもらい、教育センターに行って、いろいろなビデオを見ることも大事ですけど、他の市町からいらっしゃった外の風というものを生かして、自分たちだけで完結しないという仕組みはあるのですか？今年には異動が多かったけれど、学校が変わりましたか、ということを確認したことがあるのですが、何か吸い上げる仕組みはあるのでしょうか。

### ○学校指導課長（齋藤 信之）

私も2年間校長をさせてもらいましたが、今おっしゃるように良い取組をしているものはあるのだけれど、それが全体に広がっていない。ここはジオ、ここは学校研究というものはあるのですけれど、やはり全体に広げたいという思いもありまして、今年度からジオのモデル校、不登校のモデル校、小中連携、幼保小連携というようなところで割り振って、校長会議の後に広げることを今年から始めています。その中で、私たちもやっていたのだけれど、もっとこうしたら良いということ少し掘り下げて聞きに行く、こうすれば白山市全体がもっと上がるのではないかとということで、今試行しているところでございます。その中で、他市町から来た先生方の意見も校長先生を通じて、まずは校長先生が横の繋がりを、しっかり作らないといけないと思いますので、今そちらの方をやっているところです。

### ○市長（田村 敏和）

他にございますでしょうか。———— よろしいでしょうか。それでは私からも話をさせていただきます。ジオ育、食育、読育ということで、白山市の教育として大きくこの3育を特徴のある取組として掲げて、取り組んでいただいております。例えば、ジオ育に関しては、白山手取川ジオパークのユネスコ世界認定ということで、この白山市全域にわたってのジオパークへの取組がございしますが、その中で、学校という現場で教育という中で、様々な取組をいただいております。ただ、先ほど教育長からも話がありましたが、このジオ育を行うことによって、子どもたちがどう変化していったら、素晴らしい影響、効果があるのか、子どもたちの育ちにどう関わっているのか、ということも大切

なことだろうと思っております。例えば、先ほど水の豊富なところというお話がございましたが、そこに生活している子どもたちが、どう学んでいくのか、どう学ぶことが良いのか、ジオ遠足等、様々な取組をしているわけですが、その中から多分、子どもたちの大きな変化もあるのだろうと思っております。各学校でやっていますが、それを今回交流会という形で発表をしていただいて、子どもたちの学びの様子も分かるようになってきているのは、素晴らしいということをおもっております。それ以外にも、子どもたちが学習したことを表出する場面として、先ほど言いました各学校の発表、交流もそうです、あとは調べ学習のコンクールもそうでしょう、あと、ライン賞もございますが、様々ないろいろな発表の場があり、ここ最近では、各地域コミュニティの文化祭において、小学生、中学生が発表する場を設けて、場所によってはポスターのような形にして、文書での発表というところもありましたが、子どもたちが学んでいるものを、地域に発信するということも増えてきていることをうれしく思っている次第でございます。どちらにしましても、このジオ育というのは、白山市の本当に大きな取組として、今後もさらに、いろいろ発展もしていかなければいけないことだと思っております。ご存じのように来年に入りましたら、ユネスコの方からこのジオパークの取組について、様々な調査にもいらっしゃいます。再認定だからということではなくて、子どもたちがこうやって頑張っている成果というものがどうあるのかということ、しっかりと伝えていかなければいけないと思っております。最近では、ジオパークという子どもだけの取組ではなくて、大人のジオパーク遠足ほか、様々な地域コミュニティにおいてもジオパークに関する取組が増えてきておりますので、ぜひこのジオパークについては、今後とも取組をしっかりとお願いしたいと思っております。

あと、食育に関しましては、地産地消という考え方、そして今後はオーガニックビレッジ宣言ということも控えております。やはり食に関して白山市は、子どもの安全安心、健康への取組として、しっかりと取り組んでいるということ、オーガニックビレッジの宣言も含めて、しっかりとやっていきたいと思っております。自校調理で給食を作っております。これはきちんと堅持をしていきたいと思っております。自治体の中では、給食センター化というものが多くなってきている実情もございますが、自校調理をすることによって、食の安全性、

それこそ食べる時のおいしさ、楽しさというものに繋がっていくのかということをおもっています。ただ、先ほど給食の無償化についてのお話、ご意見もございました。例えば、給食費の徴収もそうですし、それ以外にも、世の中が大体キャッシュレスで動くことが多くなっております。それを後戻りするような世界にはならないと思いますので、そういう世界でどうやって教育をしていくのかということも必要になってくると思っております。少し話が飛びますが、いわゆる詐欺について、石川県でも最近とても詐欺が多く発生して、何億というお金が詐欺として取られているわけがございますけれど、簡単に振込で何億でも何千万というお金を簡単に送ることができる。昔ならできなくて、現金を持って運ばなければいけなかったのが、簡単にできてしまう世界だから狙われることも多くなっていくのかというふうに思っています。

話がそれましたけれど、あと読育に関しては、やはり白山市ならではの特徴的な取組がたくさんございますので、今後ともその取組をしっかりと進めていただきたいということと、その効果として子どもたちに対する取組と子どもたちの変化というものもまた、目を向けていただければということをおもっています。一つ気になったのは読書量が若干低下しているということで、学校も働き方改革等いろいろな面で、読書の時間の確保、または場を広げることといった、その辺がどうしてもある程度絞られてきているのが実情かということをおもっていますが、工夫できるところがあれば、工夫していただければということも思っております。

あと最後に、良いものを真似る、学校間で見たり学んだりというご意見が先ほどございましたが、以前は学校の指定校があって発表会があったり、課題について研究をして、みんなで行って勉強したりというものがありましたが、今はほぼない状態になっております。そういう中で指定して、校長会等で話をしているということでございますので、ぜひその辺の取り組みもしっかり進めていただいて、良いものを広げていくということも、ぜひお願いしたいと思っております。最後になりますが、この3育というものは、この白山市にとって本当に宝物のようなものだと思っております。しっかりと今後とも、育成をしていって、広がりやをぜひ、目指していただきたいということをおもっています。本日はどうもご苦労さまでした。

それでは貴重なご意見をたくさんいただきまして、誠にありがとうございました。これから皆様方とともに、本市における教育行政をしっかりと進めて参りたいと思っております。それでは進行を事務局にお返しをいたします。

---

**○教育総務課長（西村 幸広）**

ありがとうございました。本日協議いただきました議題につきましては、皆様のご意見を参考に、今後の事務事業を進めて参りたいと思っております。

これをもちまして、令和7年度第2回白山市総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

---

**閉会 午前11時49分**